

2026年、キャリア支援の現場から―専門職に就く学生の歩みを支える―

就職はゴールではない。現場に定着し、専門性を発揮して長く現場に携わる人材となる未来を見据えて、就職活動を進めていく必要がある。

そして慢性的な人手不足が続く保育、福祉分野においては、その前段階としてのキャリア支援が重要となってくる。

人手不足の背景にある早期離職や都市部への人材集中などの問題は、個人の資質や覚悟だけでは説明しきれない。

現場での仕事は、責任の重さや課題共

有の難しさを伴い、入職前の学生にはイメージしにくく、ギャップを生み出す要因となっている。そのため、学生の資質と業界の構造的な課題の双方を把握する大学の役割がいま、改めて問われている。

両者の橋渡しの一環として、学科のキャリア支援委員は、学生に向けて社会的な役割の転換を特に伝えている。学生から社会人へ。支援される側から支援する側に変わるという事実は意外と意識され

ていない。

専門職は、子どもや保護者の生活に影響を及ぼす立場である。他者の人生に関わり、変えていく責任の重みを知る学生を、職業人生の出発点に送り出すのが大学側の役割と言える。

3年生は、これまでの学びを振り返り、働き方を具体的に考え始める時期に入った。一方、進路が決まった多くの4年生は卒業論文に全力を注ぎつつ、春から現場に立つための準備を進めている。個々に応じたキャリア支援では、自己理解と仕事理解を重視している。

たとえば、学生自身が大切にしたい支援の姿を把握し、志望する現場が地域で果たしている役割と照らし合わせる取り組みがある。給与などの条件面だけでなく、日々の実践や運営の理念にまで目を向ける姿勢が、結果として現場への定着と専門職としての成長につながっていく。

また、挨拶や身だしなみ、メールの書き方といった基本的なマナーも繰り返し確認している。作法を守ることが信頼関係の構築の一助となると考えている。

しかし、新任職員は防げない。大学と現場、そして地域全体が連携し、若い



専門職を育成していくこと、その積み重ねが結果として現場への定着と、地域福祉の充実につながる。ていくものと考ええる。

キャリア支援の現場では、今後